

あそ 12

2023



亀田虎童子

家系図のあるにはあるが月に雲
両隣空き家となりし小六月
思ひ出を誘ひだしたる牡丹雪
無位無官にて長生きのぬくめ酒
ゆつくり来てゆつくり帰る耕耘機
初暦おのづとおのが歳のこと

十二月集

THE・俳2

佐藤 竹僊

秋耕のごとく掘りゐる分譲地

どうしても赤くならねばといふ蕃茄

お互ひを知らぬげに飛ぶ秋の蝶

つづれさせ昨夜と同じく二時に覺め

この秋は三回も蚊を拜み打つ

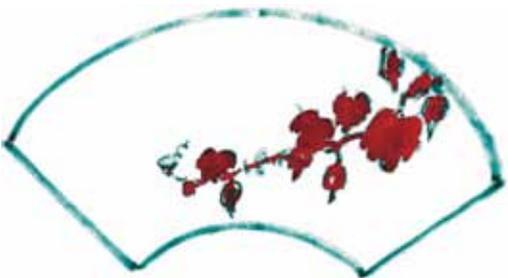
秋ついでりオールプラスチツクの三輪車

沼にまた秋の日が過ぎ沼の水

噴水を贅となしたる秋の沼

夜といふ字に眼がひとつ秋の夜

目の合へばゐずまひただす枯野の猫



非日常

赤座典子

秋澄むやぐると廻る非日常
お仲間にはらばらと会ふ花梨の実
細波の揺れて色消ゆ薄紅葉
秋興や釣師画伯の賑はしく
旗体操の健気な稽古草紅葉
天高し伊吹こんもり並びける
秋の虹平和すぎたる別所沼
虎豆をゆつくり戻す明日は雨
文鳥は留守居が嫌ひ冬隣



浮遊する

秋川泉

ばんばんと反響の屋根秋日澄む
湖面に雲流れ樁の実爆ぜる
伐採の茸あまたの太き幹
道造のハウスに寄れば秋の色
秋の蚊にまとはりつかれ長電話
さはやかに雲梯ひとつとぼしの子
横たはる駱駝の上に月のぼる
イグアナのゆるく貌上ぐ秋の夕
落下する「レジーナ」浮遊し月へ
空を切り「レジーナ」稲妻のごと



欧風

七郎衛門吉保

欧風の秋の気配の別所沼
沼守る松の気根に秋茜
ふき水の色なき風にシュワーシューワ
浮き揺れず秋の野遊び別所沼
碧霄と松の沼面に素風かな
秋出水高千穂の岩疵つけり
谷紅葉その変わりやう雪之丞
ドラゴンドラ天下の秋を見下ろせり
脚立の夫指さす妻と林檎狩
紅玉に口を窄めて昭和かな

別所沼

篠田純子



沼杉の膝根いくつ昼の虫
木犀の香の明るしよ別所沼
釣り人の竿の先なる秋思かな
秋暑しなんと鰻の自販機ぞ
「いい仕事した」と呟くさやけくて
町内納涼会こどものフラへ大拍手
熊蟬の近し排水溝浚ふ



左耳

篠田大佳

目的地定めかね晩秋の風
百合鷗漁りのこゑのしづかなり
秋日和気鬱な少女詣でけり
税務署は昭和様なり秋の昼
晩秋やザツクに汚れつば九郎
晩秋の教壇ア・カペラの「ガンダーラ」
秋薔薇手柄のやうに戦史語り
摺硝子の向かうに手話や暮の秋
右耳に希望を秋思は左耳



別所沼

須賀敏子

秋麗かな女の句碑のある公園
落羽松見上げて秋を楽しめり
秋日和鹿手袋という町に
開拓の碑を見上げれば柿たわわ
貴船菊今年も増えて祖母の墓
柚子の実を夫ともぐのはあと幾度
月高し関越道で我が町へ



別所沼公園

都築繁子

吟行地の高架なホーム秋日和
草の花ひそと原爆慰霊の碑
学童も園児も駆ける秋の晴れ
秋日陰弁財天の由来読む
沼の面に浮かぶ昔日薄紅葉
噴水の高さ競わず秋日和
風の神の石像をかし秋日燦
閑静な宅での句会秋うらら



秋日和

長崎桂子

中秋の名月やかがやき勇壮
雨あがり衰へもなき秋の蝶
黄と黒色や悠悠と秋の蝶
秋野菜たつぷりの食卓や嬉嬉と
露草の群れ咲きにけりほほゑまし
秋日和テレビは身体きたへよと
十月や列島と諸島に津波注意報
秋の薔薇香り楽しむ部屋かざり
高空にふはり白雲秋の午後
この道を行き祖父の墓彼岸花



別所沼吟行

森なほ子

ひとつ摘む定家葛の帰り花

秋の小波果てなく揺らす木々の影

落羽松の根方プリーツ秋日さす

秋風やヒヤシンスハウス今日も留守

ヒヤシンスハウス寝台に秋日差し

秋の日や窓辺に枯れぬヒヤシンス

小鳥来る河童のやうな風神像

公園の古りし遊具や木の実降る



十月号作品より

篠田大佳・森なほ子・佐藤喜孝

殴られて帰る 猛暑の影法師

亀田虎童子

いつもの虎童子さんには見られぬエネルギーギッシュな作品。力を出さざるを得ない内容なのだろう。「殴られて帰る」は何か精神的にダメージを受けての帰路、俯き勝ちの足元には真夏の真上から射す日光に蹲るやうにある濃い影。その影を見つめながらの帰路である。不思議いっばいの作品である（喜孝）



現代において、人を殴ることは異常な行動です。昭和の頃の話と想像します。読みとしては、学校でしょうか、人に殴られた帰り道、猛暑の中を歩いていて、影法師が妙に気になるという主人公の様子を想像します。よくよく見ていると、影法師は泣いているようだけど、笑っているようにも見えます。その影は理性で想像する姿と違うようにも見えます。（大佳）

猛暑日の思はず洩らすひとり言

亀田虎童子

ひたすら暑さと向き合わねばならなかった、この夏。冷房の効いた部屋を一步出ると、思わず出る一人言とは、「暑い！」日本中の人が一日に何度この言葉を吐いただろうか。間違いなく今

年一番言われた一人言でしょうね。(なほ子)

ひまはりも風に戦いでみたいのに

佐藤竹僊

ひまわりの花が風の通りが悪いところに咲いてしまったようです。ひまわりを観察した作者は、ひまわりも暑いだろうな、風を浴びたら涼しいだろうなど。気づいたら、ひまわりに憑依して、風に戦いでみたいと感じています。作者の童心に満ちた一句です。(大佳)

円い山 四角い山と秋の暮

佐藤竹僊

秋の暮れ。辺りはもう薄暗く、風景も輪郭がはっきりしないが、空はまだ明るさを保っている。そんな空に山の輪郭だけがくつきりと黒く浮かんでいる。丸く、四角く影絵のように、単純化した句。(なほ子)

朝より今日も無事にと麦茶のむ

長崎桂子

静かな一日の始まり。朝の麦茶の一杯に今日の無事を祈る。毎日を大切に生きておられる作者を想います。そんなことを考えたこともなく、なんとなく毎日を過ごしている自分を反省。もつとゆとりを！(なほ子)

白南風に手足をかざす昼さがり

長崎桂子

「白南風」といふ季語を不案内なので調べた。

梅雨が終わり空が明るくなった頃、南東方面から吹いてくる夏の季節風。暗い梅雨空に吹く南風を黒南風というのに対して、梅雨明けの明るい空に吹く風を白南風という。

梅雨からそして何かから解放された思ひのある作品。はだえを直に白南風を晒す気持ちよさが伝はってくる。「手足をかざす」で、軽装になり弾むやうな作者のよろこびがこの句にはある。(喜孝)

芋虫に断固スプレー二度三度

森なほ子

芋虫を見つけた作者。見つけるや否や、絶対に駆除するという意気込みが、「断固スプレー」という言葉に凝縮されています。一度では足りず、二度三度とスプレーするという行動に、とても強い意志が現れていて、「断固」という言葉に裏付けを与えます。(大佳)

命かけて芋虫憎む女かな

高浜虚子

なほ子さんはまさに虚子に詠まれた女人。

芋虫を助けて妻に怨まれし

中村吉次郎

だうも芋虫にとつて女性は天敵のやうだ。毛虫なら

子をもためをとことをんな毛蟲焼く

黒田杏子

と焼かれるところだが芋虫はさすがにこの手は使えぬと見えてスプレー缶で対処。芋虫用があると初めて知った。(喜孝)

お父さんが干す三人分の浮き輪

赤座典子

海水浴かプールか、夏休みの子供たちを楽しませようと、親も大変です。しかも三人分！帰ってからも後片付けする若いお父さんは、息子さんでしょうか？ 見ている作者の優しい眼差し。(なほ子)

山澄めり村人六百五十人

赤座典子

典子さんが訪れた村。好感を持たれた山村。尋ねてみると村の人口は六五十人とのこと。この村の人口がほどよき数と思はれた。これより少ないと廃村に向かつてしまふ。またこれが多くなると纏まらずいくつかのグループに分かれ諍ひの元になるかもしれない。

澄んだ空気と山に囲まれた村を典子さんはユートピア・桃源郷と思はれた思はれたのだらう。

(喜孝)

遠花火両手の荷物重くなり

秋川 泉

両手に買い物を提げて家路を急いでいると、どこかで遠い花火の音。幾つになっても「お祭り」「花

火」は気持ちが悪くわめきます。早く帰ろうと思うと両手の荷物がますます重く……。よく分かる句。

(なほ子)

落蟬の強く鳴きては手を離れ

秋川 泉

道の上に蟬が落ちてゐるのをよく見かける。「落ちてゐる」と書いたが正しいのだらうか。飛ぶのが嫌になり、たまたま地上にゐるところを人の目にとまってしまったのかも知れない。又は天寿をしり其処に下りたのかもしれない。路上にゐる蟬が、たとへ仰向けになつてゐても死んでゐるわけではない。まだ何十メートルも飛ぶ力を有してゐる例を今夏体験した。このあたりファーブルに訊いてみたい。掲句命の不思議を体で以て知った俳句。(喜孝)

落蟬の腹中に蟻溢れける

斧田綾子

落蟬に思ひ遂げしか問ふてゐる

篠田純子

落蟬のまだ生きていて空を見る

大山夏子

落蟬のしばらく歩きぬたりけり

宇都宮敦子

空蟬を草へのせれば動きけり

田中藤穂

熱波にも命名せむと終戦忌

七郎衛門吉保

熱波は気象用語で、平均よりも高温の空気が波のように押し寄せる現象を言うそうです。異常気象

を気象現象として整理するために命名をしよう。終戦忌と取り合わせることによって、戦火もまた熱波のように感じられ、一つ一つの「熱波」に名前を付けたいという思いを読みます。(大佳)

大佳さんが鑑賞されてゐるのでそれ以上のことは書きづらい。が不思議な句である。自然現象で台風や風には名前を付けることはあるが「熱波」にも名前を付けたいといふ強い思ひ。それも終戦の日に絡めての思ひである。熱波をどのやうなものに例へたのかは知らぬが、吉保俳句は意図を理解出来るやうに作句に勉めてをられるが、掲句は新しい何かを模索してゐるやうに見えた。

「終戦忌」は「終戦日」が私の好み。(喜孝)

がうがうと空調服のすれ違ふ

篠田純子

「空調服」は、ミニファン付きのジャケット、あるいはベストです。屋外作業や高温作業の現場で用いられることが多く、近年は外出着にも用いられることがあります。ファンのモーターを回しているから、運転音が大きく、一度気になると空調服を注目してしまいます。猛暑を超えた暑さの一コマです。(大佳)

瑠璃色の蝶たもとほる潦

篠田純子

純子さんは『源氏物語』の講座を受講してをられる。その影響がこの句にあるやうだ。

ある意味で日常よく見かける平凡な光景。雨あがりの水たまりであらうか、それを「潦」と表し蝶がそこに飛んで来たことを「たもとほる」と表し見事に純子ワールドに変へてしまった。

借家の茅屋を『竹僊堂』と称し悦に入つてゐる人が居る。その人と通ふところがある。のかも。

(喜孝)

八月や死語の手帳に平和の字

篠田大佳

作者は「死語」を集めた手帳をお持ちのようです。そこに、とうとうリストアップされてしまった「平和」。確かに世界はますますこの文字から遠ざかるばかり。そのうち辞書で意味を調べるよになつたりして。(なほ子)

サイダーが喧嘩の中に立つてゐる

篠田大佳

サイダーを挟んで喧嘩をしてゐる。若いふたりであらうか。無言で対峙してゐるかもしれない。間に立つサイダーが静かに絶え間なく泡を立ち昇らせてゐる。喧嘩のしきりに泡を昇らせてゐるサイダー。サイダーといふ静に見えて動なるものを置いたことでよいカメラアングルに仕上がつてゐる。珈琲ではこの句の面白さにはかなはない。

一茶の句に

けし提げて喧嘩の中を通りけり

がある。記憶キャパシティの少ない私が覚えてゐる一句である。この句は動の中に静が割つて

入るおもしろさ、強いものと嬌やかなものとの対比。

国際紛争も罌粟の花を掲げて割って入る知恵者が居ないものだろうか。(喜孝)

ジッジッと短く鳴いて秋の蝉

須賀敏子

暑さで参っていたのは人間ばかりではありません。夏に外に出る蝉も同様のようで、酷暑のピークを避けてなんとか外に出たものの、暑さでヘトヘトなのか、秋蝉故の力の弱さなのか、鳴く声に節約志向がうかがえて、さぞ大変な思いをしたのだろうと察せられます。(大佳)

新築の家に赤ちゃん秋はじめ

須賀敏子

この家族の家族史の名でのエポック。至福の時である。この新築に住まはれた家族のよろこびが直に伝はってくる。喜びの中心が新築なのか、赤ちゃんなのか比べることのできないよろこびをまこと素直な表現で詠まれた。「赤ちゃん」もいろいろな言葉があるが、この句の「赤ちゃん」は素晴らしい。(喜孝)

人混みを抜けて参拝秋暑し

都築繁子

参拝の行列や、縦横に歩く群衆の暑さを感じつつ、人混みを抜けた爽快感を表現したいところですが、二〇二三年の秋はそれを許してくれません。涼しい風を期待しながら、体に吹いてくる

風は暑いままです。参拝の沈黙も、暑さで気が散ってしまいそうです。(大佳)

蓮の葉の重しほつほつ花開く

都築繁子

蓮池に来てまづ花に目が行きがちだが、この句の主役は蓮の葉。わずかの風にゆったりとやなづくやうにゆれ動く蓮の葉を重しと適確に表現された。その大きな葉の間に花が咲いてゐる「ほつほつ」で花ざかりといふ感じではない。蓮の葉と花のバランスが想像することが朝の蓮池の景を想像出来たのしく読むことが出来た。(喜孝)



秋收集

立秋の水面をよごし雨が降る
 人気無き住宅街を行く神輿
 神輿一服住宅街の小料理屋
 昼神輿時に掛け声張り上げて
 栗を食み新聞を読み子の帰る
 遙かなる太白照らす小望月
 八月の挽歌かすかな風渡る
 秋澄めり甲武の峡の一軒家
 星の秋父母の眼差し億光年
 磯蟹の巣穴ここそこささと影

佐藤 竹僊
 森 なほ子

赤座 典子

秋川 泉

七郎衛門吉保

篠田純子

夏痩せて鎖骨のパーツ外れさう
 川涼しスターマインの果てしより
 鉦叩潜む観葉植物レンタル中
 秋雨に濡れ真つ新たな横断旗
 ほぼ元気少し歩いて曼珠沙華
 重なりて重たげに行く赤蜻蛉
 庭先に稲架組む家や恵那の旅
 若人の自撮りの笑顔九月尽
 法師蟬坂の流れに唱和して

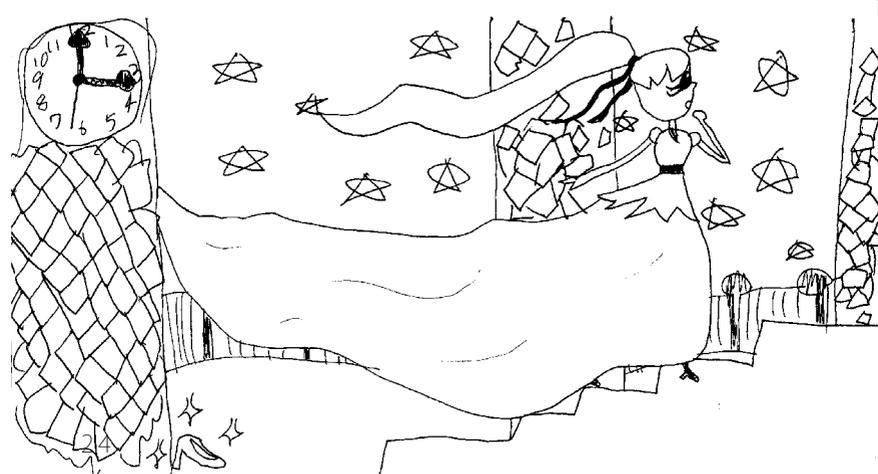
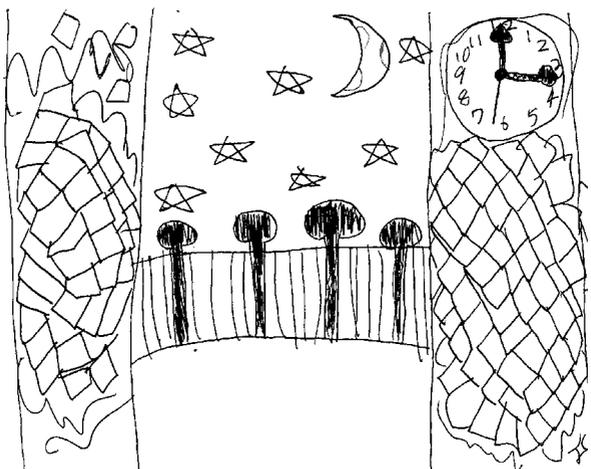
篠田大佳

須賀敏子

都築繁子

長崎桂子

喜孝抄



あとがき

令和五年の十二月号をお届けします。一年遅刊続きで
忸怩たるものがある。年末に来て生活の中からストレス
と言ふものを省く作業をしておます。そのひとつに二十
年以上インターネットで「俳誌のサロン」をつづけてき
ました。このホームページを閉じることです。妻と老後
に仕事を辞めたら何もしないのもダメだらう。体力を使
はぬことと考へ結社誌に呼びかけました。今のやうにイ
ンターネットを理解する主宰者のすくない時代でした。
呼びかけて最初に参加の意思を「ホトトギス」から頂い
たときは妻とともに喜んだことを想ひだします。妻の逝
去の折には稲畑廣太郎先生からお悔やみの文をいただき
驚いたものでした。すこし残念ですが閉じることにしま
した。これで私的に使える時間が増えることと期待して
います。「あを」のホームページはつづきますのでご安
心ください。ホームページを閉鎖することで、十二月号
は随筆を来月以降に回らせていただきました。

「秋収集」のカットはエイマ就字前に描いたものです。
原稿募集あを会員にお願いいたします。

去年の自作から一句選ひ短文を添へてください。よろ
しくお願ひいたします。(喜孝)



二〇二三年十二月号

発行日 十二月二十八日

発行所

〒177-0042

東京都練馬区下石神井一丁目六の三

サンハイツ石神井2 一階

電話

090 9828 4244

竹僊房

印刷・製本・レイアウト

表紙・佐藤喜孝

会費 一〇〇〇〇円(送料共)／一年

ゆうちょ銀行(普) (店番018) 4586402

佐藤 喜孝(サトウ ヨシタカ)